

## 農業機械のカスタマイズ承ります

うれしい訪問客があった。

本誌主催のA・1グランプリ20

11（農業・農村を核とするビジネスプランコンテスト）で「農業機械のカスタマイズ計画」を発表してグランプリを獲得した羽廣保志さん（㈱ユニーク工業専務）の横で当日

パソコンを操作していた高垣達郎さんだ。羽廣さんから事前に今回の訪問の連絡を受けていたものの、失礼

ながら高垣さんのことは記憶に残っていないなかった。その彼が、やっとご報告できるレベルに仕事ができるようになりまして、と訪ねてくれたのだ。いまでは羽廣さんが始めた「農業機械のカスタマイズサービス」という仕事を実質的に引き継ぎ、

羽廣さんの会社（群馬県太田市）に間借りしながらも仲間である社員を1人抱える㈱ロボ

ストス (ROBUSTUS) の代表者として活躍している。11年の決勝大会のとき、応募資格で職業は問わないと謳ってはいったが、当時の審査員からは農家でないことに異論もあった。それでも、主催者である僕が審査員の意見を押し切ってグランプリに推薦した。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

農業は農家だけで成り立っているものではない。鍛冶屋から始まった

ものも多い農機販売店だが、いまではメーカーから供給される部品を使

う修理はできても、自ら部品を加工したり、部品供給が停止された機械を修理できるところはほとんどない。修理に限らず、農家ならではの機械に対する要求に応えられる存在は今後ますます必要とされるだろう。

聞けばいまでは各地の農家や販売店だけではなく、大手農機メーカーからの仕事の発注も受けているそうだ。

当然だろう。すでに農業経営者たちの要求はメーカーが作る普及品ではもの足りないケースも少なくないからだ。とくに、力のある農業経営者であれば中古のトラクターや海外のネットを見て中古農機を個人輸入している場合もある。しかし、そんな場合、部品がすでになかったり、

部品供給が受けられないようなこともある。そんな人々が高垣さんとネットをつながったり、持ち込まれた販売店の紹介でその要望に込めているのだ。

高垣さんがこの道に入ったきっかけが面白い。彼の実家は東京の大田

区。育った街にはたくさんさんの町工場があった。実家は町工場ではない。そんな街に育つなかでいつの間にか町工場に入り浸るようになった。そこで、職人さんが言う「この鉄は軟らかい」なんていう言葉遣いに心が震えた。高校や大学で機械工学を勉強したわけではないが、町工場に入りし、そこに置いてあるさまざまな金属の加工品とその図面を見るなかで、また職人さんが図面を見て鉄を加工する姿が面白く、いつの間にか図面の描き方を覚えた。

そんなころ、羽廣さんに出会ったのだ。羽廣さんと一緒に仕事するなかで、農家や発注者の要望を図面に起こすことが自分の仕事だと気づいた。

すでに全国の200以上のさまざまな町工場と知り合いになった。それぞれの得意分野があり、発注者の要望を図面に起こしながら最適な職人さんを選んで仕事を依頼する。

彼の仕事はこれから広がっていくだろう。本誌でも農機具カスタマイズの例を高垣さん自身に連載で紹介してもらおうと思う。Facebookで「下請の底力」、あるいは「高垣達郎」で検索してみたい。そこに紹介されたカスタマイズの例を見て、皆様の要望を相談してみたいかがだろう。